
銀魂 ～最強の二人～

ジャン魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 ～最強の二人～

【Nコード】

N7976U

【作者名】

ジャン魂

【あらすじ】

宇宙の喧嘩師と地球の喧嘩師が手を組んだ！
目的は違えど標的は同じ・・・
かぶき町を・・・江戸を守れ！

プロローグ 宇宙と地球の喧嘩師（前書き）

どうもジャン魂です。

このお話は、警告はありませんでしたが、少し残酷描写が含まれます。（予定ですが）でも、よっぽど苦手な人じゃない限り見れると思うので警告はしませんでした

なので大体の人は安心してご覧ください。
それではどうぞ！

プロローグ 宇宙と地球の喧嘩師

「……………ここは宇宙海賊春雨戦艦内。処刑広間にて。」

「デカイ借りができちゃったね。仕方ない。アンタと殺り合うのはしばらく中止にしよう」

それに・・・アンタと一緒に地獄廻りも楽しそうだし」

「フン」

「さて。手始めにどこからいこうか？やっぱり……………」

侍の星？」

「……………だな」

「アンタは何のために戦う？」

「……………俺はただ・・・壊すだけだ。
すべてを」

「ふーん……………よし。一緒に行こうか？
アンタと一緒に地獄廻りさせてよ？」

「……好きにしろ」

「いいんスカ晋介様！そんな奴信用して！」

「……まあいいじゃねえか」

「しっ……晋介様がそうおっしゃるなら……」

「面白いでござるな。宜しくでござる」

「こちらこそ。」

「おいおいマジかよすつとこどっこい！団長。アンタ海賊王になるんじゃないかったか？」

「それにもまず侍の星を消さないと……。それに仲間は多いほうがいいでしょ」

「ふん。勝手にしろい！」

「あの……私を忘れてませんか皆さん」

「黙ってるッスロリコン」

「私はロリコンじゃないフェミニストです……！」

この二人の目的はいかに・・・？

ブローグ 宇宙と地球の喧嘩師（後書き）

本編は一話から。

今回もごひいきにお願いいたします・・・

第一話 いつもの日常にて

万事屋。

ここは「万事屋銀ちゃん」と言う名の何でも屋。

この店は基本何の依頼も入ってこず、たいていの時間は暇をしているのが日常といってもいい。

「銀ちゃん。おなか減ったアル」

今は昼飯時。だが、さいきんは仕事が少なすぎるせいで金がまったくといっていいほどない。

「はあ。どうしたものか」

「ホントにどうするネ。このままじゃ私達飢え死んでしまうアル」

「銀さん。どうしましょうか？」

「新八ん家はあ？お前の家ならなんかねエの？」

「残念ですけど僕んちには姉上がいます。姉上が僕がお腹をすかせてるって知ったら銀さん殺されますよ？それに姉上にご飯を作ったら……」

「……だよなあ」

「あれは私もいやアル！」

誰だって嫌だろうというのは、新八の姉、志村妙の卵料理のことである。

あれをともに食べられるものはそういない。

弟である新八もそれを食べて目を悪くしたらしい。

「じゃあどうしましょうか僕達。もう何も食べるものありませんよ・
・・」

「ああ・・・・・」

「お腹減ったアル・・・・・」

また、このような会話を繰り返しているのが日常である。

三人はしばらく考え込んだ。

「ああ」

「どうしょ・・・」

「お腹減ったアルよ・・。こんな時は定春の散歩にでもみんなで行くアル。知り合いに合うかもしれないネ」

「それだ！お前珍しく頭働くじゃねえか！」

「珍しくとは何ネ！」

「じゃあ定春つれていきましょー二人とも」

「しかたねえな」

「じゃ行くアル！」

三人は神楽の提案により、三人で万事屋の飼い犬である「定春」の散歩に行くことになったのであった。

第一話 いつもの日常にて（後書き）

さいしよはまあこんな感じで。
気長にいかせて頂きます。

じゃあこれからも宜しく願います。

第二話 着信

出来事の前夜。

「…貴様誰だ」

「クククツ…ツラア。」

「貴様たか・・・」

ブシイイイ！！！

「…た…高杉…貴様！」

「ククククツ…悪りいなツラア」

「ぬ…」

ドタッ

桂はその場に倒れこんだ。

その体の辺りは、おびただしい量の血であふれている。

「俺はただ壊すだけだ。この…腐った世界を。クククツク…」

「ハアー・・・誰にも会わないアルね」

「クウウン・・・」

「定春もお腹すいてるアル。どうしヨ銀ちゃん？」

定春が元氣のない声で鳴くのをきくと神楽が言った。

「んなこと言っただってよぉ…ねえもんはねえ」

「だってこのままじゃ…」

「とりあえず一回座りませんか？」

「そうするアル」

新八の提案に神楽が乗り、銀時もしそれにしぶしぶついていった。

そして向かったのは河川敷。

三人はそこに寝転がる体勢をとった。

そして30分後。

『ハアー…』

三人のため息がかさなったそのとき

「こんなところで何してるんですかイ旦那ア」

「お！万事屋！それに新八君！こんなところにいたのか！」

それを見た瞬間三人の目つきが変わった。

「……まったく、なんでお前らはいつもいつも」

「ごちそーさまアル」

「ありがとうございます！」

「ゴリラも役に立つな」

「誰がゴリラだ！！俺は近藤だよ！！」

「まあまあ落ち着け近藤さん。俺らには目的があっただろ？」

「そうですア。土方のいうとおりですア。これでこいつの役目は終わりですア。さっさと副長を辞めろそして死ね土方」

「……!! てんめえ……」

「まてまて落ち着けトシ!!」

今度は三人の言い合いが始まってしまった。

「あのー……それで今『用がある』とか言ってますでした？僕らにですか？」

新八がその三人を止めに入り、話を元に戻す。

「おおその話だったな！ちょっと聞いてくれるか？」

「依頼か？なら金取るぞ」

「今ので!!」

「だめだ。もつとよこせ。」

「クソこいつら!!……もういいや。それでいいから話すぞ」

「何アルか一体？」

近藤の表情がうつて変わったので三人は不思議に思い、顔を見合わせる。

「お前ら……攘夷志士は知ってるな？」

「攘夷志士？……ああ」

攘夷志士。それは開国の折、最後まで侍の国を守らんとして戦った
ものたちの生き残りである。

そして20年たった今もいまだに活動が続けている集団だ。

「その攘夷志士の動きがな…最近活発になってきたんだ」

「ハア？」

近藤の言っていることがよく分からず、三人はまた顔を合わせる。

「要するにだ、さいきん攘夷志士の活動が著しくなっていて、止めるのに苦労してるんだ」

「俺らにそれを止めると？はっ！ちゃんちゃらおかしいぜ。それこそお前らの仕事だろうが！」

「まてまて。確かにそれもあるが、それだけじゃない。」

「あ？」

「それだけじゃないってそういうことアルか？」

「それはだな…」

近藤の表情がまたさらに真剣な表情に変わった。

「その志士ども、どうやら過激派の連中が中心なんだ。要するに…
鬼兵隊。」

…高杉だ」

「…！」

銀時や神楽や新八の表情がこれまでとは変わって真剣な表情になる。

「高杉って！確か紅桜のときの！」

「ああ。お前らは確か桂と組んで紅桜の計画を潰したんだっただな？」

土方が口を開く。

「そうアル。私がすごい活躍だったネ。」

「毛ほども聞いてませんゼイ？そんなこと」

「ウツさいネバカサド！お前らも何もしてないネ！」

「春雨に手を出せるわけねえだろイ？」

「フン！！」

いつものような二人の口げんかもあり、話はさらに進む。

「それでだな、詳しいことは今山崎に調べさせている。

だからまたお願いするかもしれない。今日のところは…」

ブルブルッ！！

そのとき、ポケットに入っていた土方の携帯になる。

「なんだ？…おお山崎だ。」

土方はその電話に出る。

「ちょっとはずす。」

「ああ」

「で？俺らにどうしろと？」

「高杉ならお前詳しいんだろ？だから聞こうと思ってな。」

「詳しいっていつてもそんなんじゃないやねえよ？それにあんなやつ…」

その時はずれていた土方が戻って来る。

「おい近藤さん。山崎が妙なことを言ってるやがる。」

「よし代われ。おい山崎。俺に話してみろ」

『局長！大変なんです！どうやら辻斬りが！！被害者は…』

「…なっ！」

「どうしたんですか近藤さん？」

『詳しいことはまた！』

「…おお」

「どうしたアルかゴリ」

「山崎がいつてたんだが…」

それをきいた瞬間、三人の顔が一気に驚きの顔になることとなる。

第二話 着信（後書き）

感想評価アドバイスなどがあればぜひ！！

第三話 始まり

「桂が…やられた」

それを近藤が告げた瞬間、万事屋三人が固まる。

「ハ…何言ってるアルかゴリ？」

「そうですよ…いい、言っていることと悪いことが有りますよ？」

冗談だと笑ってほしかったが、近藤の表情は一切の変化なし。

「昨日の夜のこらしい。人影のない林道でだ。辻斬りだ」

「…そんな！桂さんがそう簡単に！」

「おいおい冗談だろ？んなわけねえって」

これまで何も口にしなかった銀時がいつもと変わらない表情で言葉を発する。

「万事屋。気持ちは分かるが…」

「…新八、神楽。帰るぞ」

「ま、待ってヨ銀ちゃん！この話聞かないと…」

「銀さん！」

「銀ちゃん!」

「じゃ」

それだけ言って手をひらひらさせて、その場を去っていった。

「…銀さん」

「…銀ちゃん」

「少し酷だったか? トシ」

「ああ…でも事実だし」

「旦那と桂の奴は古いんでしょう? だったらそつとしいてやりやしょう?」

「総悟…まあそつだな」

「でも…あんな銀ちゃん見たことないヨ。心配アル」

「大丈夫でさア。旦那は旦那なりに何かあるはずでさア」

「…そつだよ神楽ちゃん。銀さんなら…」

「…ウン」

「…でも、桂さんが斬られたって…一体どういことなんですか?」

新八が話を変える。

「ああ…俺達にも分からない。だが誰かに突然斬られたというのは間違いないだろう」

「いくら穏健派とはいえ、攘夷戦争に参加してた奴でもあるし、春雨と鬼兵隊相手に互角にやりあっただけの実力は兼ね備えているはずだ。一騎打ちで殺ったとすれば相当の実力者だな」

「確かにそうですねイ。ここはやはり不意打ちとみて間違いないですかい？」

「…だろうな。だが分からないところも多い。山崎に…いや、真選組総出で調べ上げるぞ！いいなトシ！」

「…わかった手配しておく」

「眼鏡にチャイナ。今日のところはこれでいいでさア。また何かあるかも知れねエけどな」

「分かりました。それじゃあ僕達は…。行こう神楽ちゃん。」

「…わかったアル」

そして、神楽と新八は店を出てもと来た道を歩き出した。

『桂が斬られた』

ここからこの事件が始まっていく。

第四話 起っていること

「ねえ新八」

「なに神楽ちゃん？」

真選組の3人と別れてからの帰り道で、突然神楽が口を開く。

「ヅラ…ホントに死んじゃったアルか？銀ちゃんは？銀ちゃんはど
うなったネ？」

「……分からないさ。でも分かることは一つだよ」

「？」

「桂さんは…そう簡単には死なないさ。銀さんだってそんなにやわ
じやないよ！大丈夫！」

「…そうアルな…」

神楽はやはり銀時が桂のことを聞いてから元気がない。

「…神楽ちゃん？」

「なんでもないネ！さあ帰るアル！」

「…そうだね」

一方の真選組の3人は、店を出て帰ってきた。

「どうだ山崎？」

「あつ副長！それが詳しいことが分かりました！」

「やるじゃねえか。それでどうなんだ？」

「それが」

.....

「...そうか。それはヤベえな」

「はい.....このままでは」

ガラガラッ

「おいトシに山崎！どんな感じだ？」

近藤が部屋に入ってきた。そしてさらに言葉を続ける。

「近藤さんか。それがな.....結構ヤベえんだ」

「.....なるほどな。これは.....」

「どうしやすかい？」

「うわっ！総悟！！いつの間にいやがったんだ！？」

「土方さんが入ってきたときからでさア。話は全部聞きやした」

「そうか。なら話は早い。どうするか…今から考えるぞ」

近藤がそういうと、土方は屯所内の人間をすべて集め、計画会議を行った。

「そうと決まればとつつあんにも知らせとかなきゃいけねえよな？」

「ああそうしないと…」

何が起こっているのか？

それはとんでもないことが起きてるのかもしれない…

「オイその」

「あ？」

町を歩く浪人に話しかけたのは…

銀時。

「お前は…確か桂さんの昔の？」

「まあな。聞きてえことがあるんだが」

「なんだ？」

「ツラなことだ」

「桂さんの…なんだ？」

「斬られたって本当か？」

「…分からねえんだ。だが分かることは…」

「姿がみえねえんだ」

「姿が見えない？」

「ああ。エリザベスさんは残ってるぞ。

「今だに桂さんを探し回ってるがな。」

「なるほどな。それで？あてはあったのか？」

「あてっていったら……その例の辻斬り事件くらいしか……」

「……」

「高杉だ！」

「…高杉？」

「きつと…きつとあいつが何かかわってるに違いねえ！！アイツら過激派は俺らが邪魔だったんだ！だからあいつがかかわってるに違いねえ！」

「そうなのか？」

「そうだ！旦那！アンタなら高杉のこと！」

「……………」

『最近攘夷志士の動きが激しい。高杉が首謀だ』

「…ありがとさん。じゃあがんばれや。」

「えっ！？…じゃあこれで」

銀時はそういい残して、その場を去った。

「……………なるほどな」

第五話 コンビニ

「……………」

「……………」

夜の11時を回った。

だが、まだ銀時が帰ってこないのだ。

「遅いアルよ銀ちゃん。いったいどこで油うつてるネ!!」

「……………確かに遅すぎるよね」

新八も、銀時が帰ってこない以上、

神楽を一人にするわけにもいかないということで、まだ帰らずに万事屋に残っている。

「新八…銀ちゃんどうしちゃったネ!? あんなのやつぱり普通じゃないネ!」

「…確かにそうだよ。」

「新八?」

「大丈夫さ。銀さんなら何か考えがあって動いてるはずだよ」

「…だといいアル。」

「え？」

「銀ちゃん、一人でヅラのこと探し回ってるはずヨ。銀ちゃんきつと辛いアル」

「……そうだね。だから銀さんは桂さんを探しているのかもしれないよ。だしたら大丈夫だよ」

「……ちよつとそこまで行ってくるアル！」

「え？もう遅いよ？何処行くの？」

「コンビニアル！酢昆布切れたアル」

「一人じゃ危ないし、僕も行くよ」

「大丈夫ネ！新八は家に残ってるアル。誰もいないと銀ちゃんが帰ってきたとき心配するかもしれないネ！」

「……わかったよ。ちゃんとまっすぐ帰って来るんだよ？」

「分かつてるアル！」

そう言い残して、神楽は家を出た。

「大丈夫かな神楽ちゃん……」

家を出て、軽やかな足取りでコンビニまで来た神楽。

「よし。着いたアル。酢昆布酢昆布〜っと」

そしてコンビニの中に入り、酢昆布を買い、買い物を済ませてコンビニを出る。

だが出たところで、見覚えのある人物と目が合う。

「あ」

「お？」

第六話 声

神楽はコンビニに行き、酢昆布を買い、コンビニを出たところである人物と遭遇する。

「あ…サドヤロー」

「チャイナ娘か。こんな遅くまで何してるんでイ？」

夜は変なおっさんいっぱいいるゼイ？」

「お前のことアルか？そっちこそ何してるネ」

「俺は見回りの帰りに寄っただけでさア。」

「私も酢昆布買いに来ただけアル。じゃあな」

「……待て」

「え？」

総悟に別れを告げて去ろうとした神楽を総悟が呼び止める。

「何アルか？」

「……送ってってやりまさア」

「は？別にいいアルよ？」

「俺は警察でさア。一般市民を危険から守るのは当然だろイ？それに危ないだろイ？」

「お前らはそんなんじゃないダロ。…それにお前コンビニに用があるんだロ？」

「ついでに寄っただけだからいいんでさア」

神楽は少し考えて言った。

「そこまで言うなら分かったアル」

「おう」

総悟は歩き出す神楽に追いつき、二人でならんで歩く。

「サド」

「あ？」

「ヅラ…どうアルか？」

「心配なんですかイ？」

「まあ・・・」

「今のところはわからね」

「……そうアルか」

(…こいつにだけは嘘つきたくなかったんだけどな)

「旦那が…心配ですかイ？」

「！…うん」

「あの人は幸せもんですねイ。いろんな人から厚い信頼を受けて。」

「え？」

「旦那ならきつと大丈夫でさア。俺が保障しやす」

「なんでお前が保障するヨ？」

「そりゃ…まあ何でもいいだろイ？」

「何だヨそれ」

「まあ大丈夫ってことでさア！心配すんじゃない。アンタの柄でもないでさア！」

珍しくSな総悟が慰めてくれたことに神楽はびっくりした。

「…なんかお前今日優しいアルな／＼」

「え？」

神楽が小さい声で言ったので、総悟には聞き取れなかった。

そして、万事屋に着いた。

「ここまでアルな。ありがとナ！」

「あ…おう。じゃあな」

「あと…嬉しかったアルよ！」

「え？」

「じゃあな総悟！」

「お、おう」

そして神楽は階段のほうへと向かっていく。

総悟はその背中を見て思った。

（チャイナ、お前は強いやつでさア。だから俺はこいつのこと…）

神楽は

（…あいつ…意外といい奴アルな）

そのとき

「神楽」

…え？

神楽にとって聞き覚えのある声が耳に入った。

第七話 目的

「神楽」

（……え？）

そのとき、神楽にとって聞き覚えのある声が聞こえた。

「…誰アルか？」

「ここだよここ」

声のするほうを見ると、そこは万事屋の屋根の上だった。

「……神威」

（神威？）

総悟には神楽が誰としゃべっているのか分からず、その会話を不審に思った。

「相変わらずだね。」

「何してるアルかお前！」

「ちょっと用があつてね」

「用…？」

神威は屋根の上から飛び降りて、道に降り立つ。

「うん…で？その人は」

「…お前には関係ないネ」

神威は総悟の腰付近を見て、そして言った。

「ふーん…君も侍？」

「まあそうですね。アンタは？」

「バカ提督」

「はあ？」

「神威！ここに一体何しに…！」

「お侍さんは何処？」

「…お前に教えるはずないネ！」

「我が妹ながらひどいなー」

「お前…！今更どの面下げてそんなことがいえるアルか！家族も捨てたお前が！」

（こいつ…兄貴か。1度みたことあらア。たしか春雨の…ってことは）

「お前春雨か。高杉と来やしたねィ。ここに何のようでィ？」

「な…高杉？」

神樂が総悟の言ったことに疑問を発する。

「うーん…もう知ってるのか。まあ目的といったら…」

そのとき

ヒュン

ガキイイイン！！！！

豪快な金属音が辺りに鳴り響く。

「…今を受け止めるんだ。侍ってやっぱりすごいじゃん」

「どうでしょうかねィ」

ドン！

ヒュ！

ガキイイイイイン！

ザン

二人はもう1太刀交え、そして距離を置く。

「へえ。じゃこついつのはどうかな？」

ズガガガッ！！

持っている傘から弾が発射される。

キンキンキン！

総悟はそれを難なく刀ではじき返す。

「やめるネ神威！サドもアル！」

ブシ！ブシュ！

だが、すこしずつ弾が総悟にあたり始めた。

（こいつ…夜兔！）

ドン！

「がっ！」

右手に持っていた刀をはじかれた。

「…………しまッ…！」

ヒュバ！

「終わり」

ザン！

「…が…あ…」

神威の手刀が総悟を貫いた。

「お侍さん…あの銀髪のお侍さんを殺すことかな」

「イ…あああああああ！！！！！！！！」

神楽の悲鳴が辺りに響きわたった。

第八話 時間稼ぎ

ガラガラ！

「神楽ちゃん！？どうしたの…って沖田さん！」

神楽の悲鳴にいち早く反応してきたのは新八だった。

「神楽ちゃん！一体何が…」

「……」

「神楽…ちゃん？」

「どうやら意識を失ってしまったようだね」

「……！！お前は夜王のときの……！！」

新八は神威の手についてる血を見て、この状態になった原因を悟った。

「お前がやったのか…」

「そうだよ。」

「なぜだ！」

「そいつが邪魔してくるからさ」

「お前は一体何のために…！」

『そこで何をしている！…って新八くん…総悟！』

近藤が真選組を率いて現場に来た。

「一体何があつたんだ!？」

「あーあ……せっかく面白くなりそうだったところだったのに。なあ阿伏兔」

『だんちよ。またあんたの悪い癖だ。そうやって敵さん招いちまうところ直したほうがいい』

もう一方からは第7師団が歩いてきた。

「こ、こいつらは…」

「は……春雨で…さア」

「総悟!そうだ!手当てをしねえと…!」

「そこのお侍さんもなかなか察しがいいじゃない そのとおりだよ。だけど僕たちはただの春雨じゃない」

「なんだと…」

「早く行ってあげなよ。早くしないとあの銀髪のお侍さん…」

死んじゃうよ?」

「な……銀髪の…万事屋か!」

「ハア……ハア… お前ら……たしか高杉の手の奴か…」

「そうでござる。お前はここで終わりでござるよ?」

「チツ…これはさすがにやべえな…」

銀時は歩いているところを突然万斉ら鬼兵隊に襲撃され、

応戦していたが、数には勝てなかった。

「それと……早くしないとあの夜鬼の女の子は

どうなると思うでござる?」

「神楽のことか…?」

「神威は妹を春雨に入れようとしているでござる。だからつれてい
かれるでござるよ?」

「!!!!な…んだと!!!!」

「今頃はもう神威が連れて行っているところ…」

ダン！

「神楽ア！！！！」

銀時はわき目も振らずに万事屋に向かって走り始めた。

「…逃げたでござるか」

「よかったですか？万斉様？」

「どの道このあと晋介が殺るはずだから手を出すのはこの時間稼ぎだけで充分でござる」

第八話 時間稼ぎ（後書き）

感想＆評価などあれば是非お願いします！

第九話 10日

「万事屋が…死ぬだと？」

「銀さんが…どういうことだ!？」

「今鬼兵隊の河上と殺り合ってるころじゃないかな？」

「鬼兵隊…高杉の!どういうこと」

「新八君。今日あの子の調べで分かったんだが…どうやら奴ら…
手を組んでいるらしい」

「え!?!手を組んでるって…こいつと高杉が？」

「ああ。神威が元老を無視して提督を潰したらしいんだ」

「な…ということは高杉が銀さんを!」

「お見事。そのとおりだよ。そしてその情報を集めた彼も見事だったね」

「……………」

「ロリコンに血祭りにあげられているだろうけどね」

「…ザキ!まさかお前らザキまで!」

「どうかな？？」

「てめえ！！！」

ビュン！

土方が神威を斬りにかかった。

だがそれを意図も簡単にかわしてみせる。

「あともう一つ。その女だけど」

「……」

「前に地球に来た時に、団長がウチの部下を一人殺しちまったんだ。だから人員が足りなくてね。その団長の妹に来てもらうことになった。」

勝手に団長が決めたんだがね」

「な！ふざけるな！神楽ちゃんはお前らなんかに！」

ヒュン！

スッ！

叫ぶ新八の後ろに回り、首を神威のチョップが襲う。

新八もそれを受け、気絶する。

「君達に拒否する権利はないよ。じゃあね」

阿伏兎は気絶している神楽を担ぎ、去る準備を済ませた。

「く！待てエ…！」

手当てをされていた総悟が、消え入りそうな声で叫んだ。

「あとね、俺達はあと10日でこの町…いや江戸を滅ぼすから。

その間はこの町にいるから。その前に俺達を探し出して殺さないからね」

「まて！チャイナ娘を救え！」

真選組が第7師団を追うが、いとも簡単に突き放された。

「じゃあね。お侍さんたち。」

「くそオ！まて！」

土方が追ったが、もう第7師団の姿は見えなかった。

「…やべえぞ。奴ら江戸を…」

「ああ。それにザキヤ万事屋もどつなつてやがるんだ」

「…！近藤さん！」

近藤は土方に呼ばれ、振り向いた先には、

意識を失った山崎を担いだ銀時が歩いてきていた。

「…！万事屋！それにザキ！」

「…神楽は…」

「連れて行かれちゃった…ワリイ」

すると銀時は何も言わずに辺りを見渡してから言った。

「話を聞かせろ。入れ」

「ああ」

新八を銀時が担ぎ、真選組が総悟を担架で万事屋に運びこんだ。

第十話 覚悟

万事屋の中。

「まあ座れ」

「すまねえな」

「じゃまするぜ」

銀時が近藤と土方を万事屋に招きいれ、残りの真選組も同じく中に入れる。

「一体ここで何があった？」

「…それは俺も途中からだっだし、最初のほうはわからねえが…」

でも分かるのはあの春雨の奴がチャイナを連れて行こうとして、それを阻止しようと

総悟が戦ったんだろうってことだ。」

「あとは奴ら10日間でこの江戸を滅ぼす気らしい

それまでに見つけて阻止しねえとってことだ」

「…なるほどな。で…このありさまってわけか」

「…そうだな」

新八は気絶、山崎は全身傷だらけで手当てされており、
総悟は幸い命はとりとめ、今は眠っている状態である。

「万事屋。ザキを一体何処で…？」

「ああ、俺も鬼兵隊の追跡を回避してきたんだ。それでここに来る
途中に

全身傷だらけで倒れてたこいつを見つけたから担いできたんだ」

「そうか。それはすまなかったな」

「べつにいい。それより、神楽は…？」

「……悪リイ。連れて行かれちゃった。

あいつらチャイナ娘を春雨の仲間にしようとしているらしい」

「春雨の…！待て、春雨のどんな奴が来た！？」

「はあ？えーとたしか…傘持ってたから夜兎だとは思っけど…

「チャイナ服だったな」

「……あいつか！」

「あいつ？オイ万事屋。おまえあの春雨の奴のこと知ってるのか？」

「ああ、一回吉原でドンパチやったことがあるんだ。

そんでアイツは、神楽の兄貴」

「そうか。どうりで…」

「チャイナ娘のやつ、気を失ってたからな。大丈夫だろうか…」

「大丈夫じゃねえだろ。目の前でそいつ刺されたんだろ？」

銀時は総悟を指差して言った。

「ああ。それがどうした？」

「なんでもねえよ。それより総一郎君は大丈夫なわけ？

なんか相当やばいように見えるんだけども？」

「ばか。これが大丈夫に見えるか？」

「こいつは戦えねえな」

「ああ。」

「……………だ、旦那」

「……総悟！」

総悟が目を覚ました。

「あいつは……チャイナは…神楽は…」

「……あの春雨の奴に連れて行かれちゃった。

しかもそいつは神楽の兄貴だ」

「……そうですかイ。…旦那…」

「ああ？」

「アイツを頼みまさあ。俺はあいにくこのざままでイ…

すいせん…」

「もういい総悟。寝てろ」

「……………」

土方の声とともに、総悟は再び眠りについた。

「…なあおい」

「ああ？」

「大串君。お前……『10日間待とう』なんて気はねえよな？」

「…ねえ」

「ゴリラストーカーは…」

「あるわけねえ」

「……今日は寝て、明日から調査だ。とことん探す。
報酬はたっぷり頂くぜ？」

「……なんで俺達の依頼内容がわかったんだ？」

「お前ら、あいつが騒いでたからきたんじゃないかって、俺に用事があったから来たんだろ？」

ホントは全部知ってたんだろ？手を組んでたこと。

まあさすがにやつが神楽の兄貴って事は知らなかったみてえだったな」

「……まあな。」

「それで……俺達に頼むのか？」

「俺達？……！」

「僕を忘れないでくださいよ」

「し……新八君……！」

新八はおきて、部屋から出てきた。

「全部聞いてたのか？」

「沖田さんのあたりからです。」

「そうか。新八君はもう大丈夫なのか？」

「僕はもう大丈夫です！銀さん、僕にも協力させてください！」

「死ぬかもしれねえぞ？」

「僕は万事屋の一員であり、侍ですから！そのくらいの覚悟は出来てます！」

『死ぬ』といったのにもかかわらず一瞬のためらいもなく答えた新八に

銀時は少し安心の表情を見せた。

「よし分かった。じゃあ心について来いよ？」

「はい！」

「万事屋。俺達はお前に頼むことにする。」

報酬はちゃんと出すさ

「……じゃあ今日はもう遅いから寝るぞ。明日からな。」

時計を見ると、もう深夜1時になっていた。

「じゃあ明日の昼にここで」

「じゃあな新八君！」

「はい。おやすみなさい近藤さん。」

「邪魔したぜ」

そういつて総悟を担架で運び、山崎を担ぎ、真選組は去っていった。

「…明日からですね。」

「ああ。お前も今日は泊まってけ。早く寝ろ」

「銀さん」

「ああ？」

「桂さんのことは…」

「…あいつのことだ。心配いらねえだろ」

「…よかった」

「ああ？」

「何でもありません！神楽ちゃん絶対に助けましょう！」

「…分かってる」

「じゃあおやすみなさい」

「ああおやすみ」

明日から二人の野望を阻止するための戦いが始まろうとしている。

第十話 覚悟（後書き）

感想＆評価ある方はぜひお願いします！

第十一話 行動パターン

翌朝。

「銀さん起きてください朝ですよ！」

「……起きてるよ」

「うえっ!？」

いつもならこの朝の7時という時間は万事屋では誰一人として起きていない時間だった。

だが今日の銀時は珍しく起きていた。

「アハハハ…起きてたんですね銀さん」

「全然眠れなかった」

「……そうですよね。僕もです」

「……やっぱり、神楽が心配なのだろう。」

朝食を終えて、8時を回ったところでインターホンになる。

「おーい万事屋。きたぞー」

「おー入れ」

真選組だ。さすがに昨日とは違い、来ているのは近藤と土方と山崎だけであつた。

「山崎さん。もう大丈夫なんですか？」

「うん、このざまだけどね。昨日は本当にびっくりしたよ。」

山崎は片足に包帯をして、松葉杖で歩いている。

「何があつたんですか？」

「まあまあ。こんなところで立ち話もなんだから入れや」

「お。じゃあ邪魔するぜ。」

土方を先頭に近藤と山崎も万事屋に入る。

「それで山崎さん。昨日一体何があつたんですか？」

「昨日は本当にびっくりしたよ。なんたつて屯所の門の前で普通に見張りをしていたら

突然変な奴が現れて剣を振りかざして来るもんだから。

逃げてたら、今度は後ろのほうから銃で足を打たれて歩けなくなつたんだ。

それで命からがら逃げ出してきたんだけど……途中で歩けなくなつて

ね。

そして旦那に助けられたってことだよ。

旦那。ありがとうございます」

「ん？いや別に」

「そうですか…。奴らなんでこんなに町の住民を狙い続けるんです
ようか？土方さん」

「わからねえ。だが確実にいえることは神威と高杉は組んでいるっ
てことだ。」

この状態はマズイ。奴らこれから何をしでかすか…」

「とにかく…奴らの行動パターンを調べないと…」

「ああ」

山崎がそういったとたんに、銀時が言った。

「何ですか旦那？」

「奴らの行動パターンは分かるぞ。おそらくだが」

「なんなんだ？言ってみろ万事屋！」

「おそらく俺だ」

「俺？…お前がどうした？」

近藤がさらにゴリラっぽい顔になって頭を悩ませている。

「要するに奴らは俺を動かす目的で動いてるんだ。」

神威は特に俺と戦いたがっていた。おおかた俺に関係のある人間を傷つけて

俺の闘争心を買おうってんだろう」

「な…なるほど！…しかしなんでそんなこと分かるんだ？」

「あん時に調査してたの。」

「あん時…ああ、あのファミレスのときか！」

「そう。」

（そうだったのか。やっぱり銀さんは…）

新八はこのとき少し安心した表情を見せた。

「でもこれが分かったところでなにか奴らの行動パターンが分かるか？」

もうお前に関係のある人物っていったら…」

「新八、お前家に帰れ」

「えっ？何言ってるんですか銀さん。」

「昨日からお妙に顔見せてないだろ。姉ちゃん心配してるから一回帰れ。」

俺らがやつとく」

「…分かりました。」

新八は銀時に言われたとおりに万事屋を出た。

「これでいいのか？」

「ああ。この調査にアイツはやっぱり危険すぎる」

「わが義弟を傷つけられないからな」

「お前の弟じゃねーだろ」

「よし。とりあえず聞き込みだ。それに万事屋。お前が動けば何かしらの効果がある。」

「どういふことですか副長？」

山崎が疑問を抱く。

「要するに奴らは俺が動き出すのを待ってるわけだろ？」

だから俺が動いたことを奴らが知れば動くかもしれないからな」

「そういつことだ。よし行くぞ山崎、近藤さん」

「おお！」

「はい！」

「じゃいきますか……」

そういつて四人は家を出る。

第十二話 調査開始！

万事屋を出て、とりあえず被害の手がかりはないかと町を歩く四人。

「山崎。お前も帰ったほうがいいんじゃないのか？」

「え……そうですか？」

「ああ。怪我人は足手まといだからな。」

「…分かりました」

山崎は土方に言われたとおり、屯所への道を歩き出した。

「これで三人か」

「ああ。じゃあまずはどうする？」

「要は奴らの場所を知ればいいんだろ？それなら目撃者情報が一番早いんじゃないのか？」

「よし、まずはそれで行こう」

「大串君にはいいこと言っんじゃない？」

「うるせえ。」

「よし行くぞ！」

近藤と土方と銀時は三手に別れて、高杉と神威の目撃情報を探すことになった。

ここは春雨海賊団戦艦内。

「ようやく動き出したねお侍さんは」

「団長の遊び好きにも困ったもんだ。ったくよー…」

「晋介様ー！！奴ら動き出したみたいッス！」

「これでぶつかる日も近いでござるな」

「それよりこの娘目を覚ましませんね…ちゃんと寝かせておいたほうがよいのでは？」

「先輩。ロリコンもたいがいにするッス」

「ロリコンじゃないフェミニストです。だいたいね、この年頃の娘はあと2、3年すれば

きつと化けるんですから」

「はいはい。分かりましたよ武知変態ペ」

「変平太です!!」

そういつてまた子はしぶしぶいすに座らせていた神樂を担ぎ、

布団の上に移動させた。

「ご苦労だった。お前らは休め」

高杉は三人にそういつて部屋から立ち去った。

「…晋介様」

「大丈夫でござるよあの男は」

「万斉先輩…」

「……銀時イ…早く来い」

第十三話 一枚の紙

恒道館道場。

新八は自分の家に帰ってきた。

「姉上ーただいま帰りましたよー」

「……………」

「姉上？」

だが新八が妙を呼んでも返事がない。

「姉上ー！どこですかー！！」

「……………」

やはりいくら呼んでも返事がない。

「何処いったんだろ？」

ガラガラ。

「なんだろうこれ？」

いつも二人が過ごしている部屋の机には、一枚の紙が置いてあった。

新八はその紙を手にとって、それを見た。

「……………うそだ」

その手紙を見た後、新八はとたんに表情が変わった。

「…うそだ…姉上が…!」

ダッ! ! ! ! !

とたんに表情を変えて道場を出て、もと来た道を全速力で駆けた。

「おいお前」

「なんですか？」

「最近巷でこの町のものが辻斬りにあっているのは知ってるな。」

それについて何か知ってることはないか？」

ここはホストクラブ『高天原』

そこに、土方は例の事件について聞き込み調査を行っているところだ。

「はい…まあ確かに知っていますが…」

「それで？ なにかないか？」

「辻斬りはありませんが…」

「なにかあるのか？」

「こんなことでもよかったらなんですけど…」

昨日から狂死郎さんに連絡がつかないんです」

「狂死郎？ …ああこの店の…」

「はい。ここにも来ませんし、携帯に電話しても連絡が取れず困っていました」

「なるほどな…ほかにはねえか？」

「はい…特には」

「そうか。失礼したな」

土方は高天原を出て、さらに歩き出した。

「失踪か…何かありそうだな」

一体何が起きているのだろうか？

第十三話 一枚の紙（後書き）

感想&評価などありましたら是非宜しくお願いします。

しかし長々と話が進まなくてすみません。

わたくし自身気長にやっていこうと思っていますので（笑）

ではこれからも宜しくお願いします！

第十四話 置き手紙

ここはスナックすまいる。

ここには本人の強い希望で近藤がここに来ることになった。

「すいませーん」

「ああ近藤さんですか。どの娘をご指名になれますか？」

「いやあ今日は…」

「近藤さん！」

そこに現れたのはおりようだった。

「あ！おりようちゃん。どうしたんだい？」

「何しに来たの？」

「何しにつて…そりゃあ目的は一つだろ…」

ああでも事件の聞き込み調査をしに来たんだった」

「聞き込み？事件つて何？」

「最近この町で辻斬りが多発しているって言う事件は知っているよね？」

「ええ。その聞き込みっていうこと？」

「そうなんだ。それで何か知っていることはないか？」

「…知っていることはないわね。でも……」

「なんだ？何か知っているのか？」

「それが…お妙の行方が分からないのよ」

「何イ！お妙さんが行方不明！？どういうことだ！」

「わからない…でも昨日から行方が分からなくて…」

家にかけても繋がらなくて… 弟君もいないみたいよ」

「新八君とは俺も一緒にいたから大丈夫だ。それでさっき、

お妙さんが心配してるから家に行って来いって返したんだが…」

「じゃあ今なら…!!」

おりょうは携帯電話をポケットから出して、恒道館道場に電話を掛けた。

………

「……だめ。弟君も出ない」

「なんだって！？新八君は帰ってるはずじゃ……」

「近藤さん…どうするの？」

「決まってる！お妙さんと新八君を捜すんだ！」

「あ！ちよつ…」

だが言う今もなく近藤は店を出て、一目散に走り出した。

「…お妙…大丈夫かしら？」

「わかりません。だが心配ですね」

「…ええ」

近藤はもと来た道を全速力で走っていた。

「クソッ！！お妙さんの身に何かあれば…俺は！！！」

そうさげび、ひたすら走り続けた。

「うおおおお！！！」

そのとき、勢いよく走っていた近藤が道門で曲がったところで一人の男とぶつかった。

「いてて…すまねえ！今は急ぐ…て、あれ！？新八君！？」

「ててて…うあ！近藤さん！」

近藤は道で新八とぶつかり、ばったり会った。

「大変です！姉上が…！！」

「新八君！何か知ってるのか！？」

「はい！やばいんです！実は奴らが僕の家置き手紙を…」

「そこにはなんて！？」

『志村妙は預かった。』

返してほしければ俺を倒せ

鬼兵隊 高杉』

「…なんだとっ！それじゃあ…奴らにさらわれたって事か！」

「どうやらそうです！だから急がないと…！」

「おお！でもどうして…！？」

「わかりません…でも…僕達二人じゃどうにもなりませんから…」

「まずはみんなに事情を話すしかないようだな」

「…！！土方さん…！！」

その時、土方がそこに現れた。

第十五話 無言

「ひ…土方さん！」

「トシ！」

新八と近藤の前に土方が現れた。

「聞いてたのか？」

「ああ。どうやらけっこうまずいことになってるらしいな。」

土方は今までの近藤と新八のやり取りを聞いていた。

「トシ…そっちはどうだった」

「ああ。いろいろ当たってみたんだが、ホストクラブ高天原の本城
狂死郎も

失踪している」

「狂死郎さんも！？これは一体…」

「その手紙の内容を見るとどうやらこっちも高杉の仕業と見て間違
いねえな」

「クソッ！！！！一体どうなってやがんだ！奴らお妙さんまで…」

「許せねえ！！！！」

「落ち着け近藤さん。ここはまず万事屋の奴とも会っしかねえだろう」

「クソッ……」

「……なんでこんなことに」

「とりあえず万事屋を探して合流するんだ」

「ああ」

そして土方を加えて三人になった一行は、銀時を探して歩き始めた。

「……そうか」

「ああお疲れー」

そのころ、銀時は街を歩き回り調査をしていたところだ。

だがその聞き込みの結果は壮絶なものだった。

各地で辻斬りの件数多数。

そして失踪も多々あり。

しかもその被害者はすべて銀時がかつて依頼を受けたことのある人間や、

そうでなくても何かしら銀時に関わりのある人間だった。

そして銀時は聞き込みを終えて休憩がてらに公園のベンチに来たことだ。

「……はあ。奴らやっぱり俺をおびき出すつもりか」

そういつて空いているベンチに腰を掛ける。

グシャー！！

「はあゝ………まったくこんな真似しなくたってこっちから潰しに行つてやるつてのによ……」

そういつて足元に有った空き缶を勢いよく踏み潰した。

誰も見ていなかったが、銀時の眼は珍しく怒りに満ちていた。

「あ、そこですね銀さん」

「…新八！お前何で…」

「それは今から話します…」

「まったくこんなとこにいやがったか」

「お前らもか…」

「一回屯所に来い。話がある」

土方はそれだけ言っで、すぐ背を向けて歩き出した。

「…？ああ」

銀時と新八と近藤はそれに黙ってついていった。

屯所に着くまで、四人は無言だった。

第十六話 拠点発覚！？

ここは真選組屯所のなかの、土方の部屋。

そこに四人は集まり、話をしようとしていた。

「ここでやんのか？」

「ああ」

「大串君。話って……」

「……眼鏡の姉ちゃんがさらわれたらしい」

「……！……んだと……」

土方の放った言葉を聞いたとたんに、銀時は表情をこわばらせた。

「……それで僕は近藤さんや土方さんや銀さんに伝えないと思って……」

「……そういうことか」

「そのほかにもいろいろ失踪や辻斬りの話があつてな……」

「こつちもだ。それも、さっき言ったとおり俺にかかわりのある人間が集中的だ。」

「奴ら完全に俺を誘ってやがる。」

「…どうやらそうみたいだな」

その場はかなり重い空気になっていた。

その中、部屋の外からだんだん近づいてくる不規則な足音が一つ。

「…ん？」

ガラガラ

その時、部屋のドアが開いた。

そしてそこに立っていたのは…

「局長に副長に旦那に新八君」

山崎だった。

「山崎。どうした？」

「はい。怪我人でも出来ることはあると思って。」

「できること…？」

「はい。奴らの拠点を押さえました」

『……………』

山崎が一言を言い放った瞬間に、四人は一気に表情を変えた。

「なんだと！？山崎！それをどこで！！」

「はい。やっぱり目撃情報で洗ってみるしかないって思って。

それで沖田隊長が隊を動かして総力をあげて調べ上げさせて…」

「総悟！？あいつ起きてるのか？」

「いえ。さつき10分ほど起きたんですけど、もうほとんど意識がはつきりしない状態で…」

それで隊に命令を出してから…また寝ました。

やっぱりまだ深刻で…」

「……そうか。あいつ…」

「バーカ。無理しやがって…」

「沖田さん……」

「…やっぱりだな」

「え？何ですか銀さん？」

「こつちの話だ。それより、本題に入るぞ。

その拠点って言うのは何処なんだ？」

「あ、はいそうでしたね…それは…

『ターミナル』です。」

ターミナル。

そこはこの江戸の地下に流れているエネルギーを原動力として船を動かしたりしている

ところだ。

ここは幕府の重要建築物に指定されており、真選組はうかつに手出しは出来ないのだ。

だからこそ、盲点だったのである。

「ターミナル！？そうか。あそこにか！」

「そうか…考えてみれば誰もあそこには行つてなかったな。

艦隊なんて大体あそこにしかねーってのにな…」

「ばかばかしいな…」

「ま、まあいいじゃないですか！こうして場所も分かったわけですし」

「それに、たとえ行けたとしても、鬼兵隊の奴らが外の守りを固めているんで…」

侵入は大人数でなければ…」

「よし」

「はい？」

「決行するぞ…」

「は？何を？」

「やる気が…まあそれが一番性に合ってるしな」

「俺もハナツからそうするつもりだったぞ！」

土方、近藤が次々にしゃべる。

「僕もそういうことなら…」

「分かった。よし、やるか」

銀時たちは一体何を…？

第十六話 拠点発覚！？（後書き）

たくさん感想ありがとうございます！
これからもがんばっていこうと思います！

引き続き、感想評価などありましたら是非！

第十七話 強行突破

「……………また寝ちまってたか」

ここは総悟の部屋。

先ほど一回おきたのだが、総悟はまた眠りについてしまった。

まだ、傷はいえていない。

起きることさえもままならないのだ。

「…………ハア…しゃべることも…きつい…でさア」

いくら急所をはずしていても、わき腹を貫かれては支障は大きいものだ。

「こんなんじゃ…だめだったのに…」

ガラガラ！

「…ん…」

そのとき、部屋の扉が開いた。

そこからは土方が顔をのぞく。

「…総悟は大丈夫みてえだ」

「そうか。寝てるか……」

「よし……じゃあ明日だな」

「はい」

ガラガラ！

（…なんで寝てるフリなんてしたかな…

まあいいか…）

そっいつて、また寝ようとした。

「おい。俺忘れ物したわ。もどってとってきていいか？」

「え？まあいいが…」

銀時はそっいつて逆の方向へと歩き出した。

銀時は、新八や土方や近藤や山崎が行ったのを見てからドアを開けた。

「…総一郎くん」

銀時が入ったのは総悟の部屋。

「……」

「寝てるフリは分かってるよ？」

「…旦那…ですかイ」

「ほらね」

銀時は総悟の寝ている布団の隣に座る。

「何ですかイ…俺アこれでも怪我人ですぜイ？氣イ遣ってくださいエ」

「うーん…でも行くつもりだろ？」

「……どこに？」

「神樂助けに。」

「……なんのこと」

「とばけなくてもいいよ。ぶっちゃけアレなんじゃねエの？」

「アレって何ですかイ……」

「まあいいさ答えたくないなら　ともかくお前は動くんじゃねえぞ？」

「…何言ってるんですかイ。こんな状態で動けるわけねエでしょう…」

「…確かにそうだ。…まあ安心しろ。必ず助けてくる」

「…なんだかわかんねえけど分かりやした…」

「じゃあな…」

銀時は立ち上がり、ドアに向かって歩いていく。

ガラガラ。

そして部屋を出て行った。

「……旦那…ん？」

総悟の枕元に、一枚の紙がおいてあった。

総悟はそれに気づき、その紙を手取る。

「これは…」

『ターミナルだ』

(ちっ……)

その紙を見て、総悟は言った。

「……やっぱり旦那には勝てねえや…」

どうやらすべて見透かされていたようだ。

気持ちも行動も…なにもかも。

ついさっき。

「え…皆さん。何をする気ですか？」

「そりゃあ強行突破に決まってるだろうが」

「え！？強行突破って…でもそれは…」

「じゃあそれ以外に何か方法があるのかよ」

「えっと…それはその…」

土方に口を出されて山崎は口ごもってしまう。

「…それしかねえな」

「はい。」

「山崎。明日の昼に隊を全勢力を挙げて動かす。
隊長どもに伝えておけ。」

「一番隊は…」

「俺がいく」

「は…はい。わかりました。じゃあそうします」

「よし。明日の昼でいいなお前ら」

「はいよ」

「はい！」

「おお！」

土方の問いかけに全員応える。

「よし。あとは総悟の様子だけだ。どのみちアイツは戦いには使えないだろうな」

このままやったらあいつは死んじまう」

「確かにそうだ。あいつは今回ゆっくり休ませよう」

「…そうもいかねえとおもっけどな」

銀時が小さい声でつぶやく。

「あ？万事屋なんか言ったか？」

「なんでもね。それより行くぞ？総一郎君のところ」

「え？ああ…」

「おそかったな。」

「すまね。よし俺らはもう帰るわ。」

「ああ。気をつけてな」

「じゃ」

「さようなら」

銀時と新八はもう屯所を出ることにした。

来るべき決戦に備えるべきだ。

「…行っただか。」

「ああ…明日は必ず…」

待っていてくれ…お妙さん…」

「……必ず奴等を倒す」

「おお！」

「銀さん」

「あ？」

帰り道。

「神楽ちゃんや姉上…必ず助けましょう！」

「…ん？ああ…そうだな」

新八と銀時は二人並んで帰っていた。

それぞれに思いはあるが、目指すべき場所は同じだ。

第十八話 神楽

同刻。

「……ん」

（何処アルか…ここ）

「眼を覚ましたかい？」

「……！！神威！お前……！！」

「おやおや。静かにしていないと」

神楽が眼を覚ました。

丸1日気絶したまま眠っていた。

「くそ！何処アルかここは！」

勢いよく起き上がる。

「覚えていないのかい？昨日の事」

「昨日……！！」

「……そうだ……アイツが……！！」

「思い出した？お前のせいで彼は重症だよ？」

「アレはお前がやったアル！」

「彼は君を護ろうとしてだから君のせいだよ」

「ふざけるなヨ！つてかここは何処ネ！私をどうするつもりアルか！？」

「君は今日から春雨の仲間だよ」

「それはどういふ…」

「だから、君は夜兔だから地球人と一緒にいちゃいけないって事だよ？」

「そんなことないアル！私はいままでずっと銀ちゃんや新八たちと一緒に…！」

「それはたまたまだよ？お前は所詮俺達とおなじさ」

「ふざけるなヨ！お前らなんかと一緒にするナ！」

「血は争えないんだつて。じゃあうるさいからおとなしくしててもらうよ。」

「…！何するアルかお前ら…！離すアル！」

神威の手下が神楽の手に手錠をはめた。

「じゃあね。お前には奴らとは違うVIP席を用意したからね。」

ありがたき思いなよ」

その時、神楽の視界には捉えられた百人以上もの人の魂が見えた。

「お前！この人たちをどうしたアルか！…ってアネゴ！？みんな！？

ここにいるの全部銀ちゃんの知り合いアル！ということアルか！」

「決まってるじゃない。銀髪のお侍さんをおびき出すためだよ…」

「銀ちゃんを！？ふざけるな！やらせないアル！」

「無理無理 その手錠は外れないよ」

「クツ！！硬い！」

その手錠は夜兎用に作られている特別な手錠だった。

そして神楽は誰もいない牢に入れられた。

「…まあ明日には来るんじゃないかな？じゃあね」

「待つアル！神威イ！！」

叫んだがむなしく、ただ響くだけ。

「…なんでこんなことになったアルか…」

そのとき、あの時の記憶がよみがえる。

「サドやろー……私のせいで……」

神楽は総悟のことを考えてすごく心配になった。

「……なんで私あんなやつのこと考えてるネ！違うアル！私は何にも……」

だが、口ではそう言えても、心は次第に心配が増えていくばかりであつた。

……神楽のいるところには誰もいなく、ただ一つの部屋につけられた牢屋という

感じだった。

「なんでこんな暗いところに……いやアルよ。でももう夜も遅いし寝るアルか……」

疲れていたため、神楽はもう寝ることにした。

だが、心配事でまだ寝付けなかった。

「……私は夜兎だから……みんなとは一緒にいれないアルか……？」

……私はもうみんなとは……そんなの絶対にいやアル！」

そのとき、神楽の頭の中にはもう一つの記憶がよみがえった。

「お前さんを見てると兄貴のツラがチラついて仕方ねえ

殺すがいい。その血の命ずるままに。

どれだけ血に抗ったところでお前は結局兄貴と何も変わらねえ。

お前は結局、兄貴と一緒になんだ」

「…私は一体…何アルか」

その記憶が、神楽の心をだんだんと悪い方向へと向かせていた。

「…私がみんなといたら…みんなを傷つけちゃうアル…

そんなの…嫌アル。私もうみんなとはいえないほうがいいのかもしれないアルな」

そう考えていたら、自然と眠りについていた。

第十九話 決断（前書き）

投稿遅れて本当に申し訳ありませんでした！
少し事情が重なってしまいました…
では第十九話です

第十九話 決断

……翌朝。

「……ん」

「眼が覚めた？」

「ん……ってうわ！神威！お前何レディーの寝起き勝手に除いてるネ！？」

「別に兄妹なんだからいいじゃん。それより早く出てきなよ」

「……フン」

神楽はそついいながらも神威の言うとおりに外に出た。

「何アルか。今度は何をするアルか」

「へんな言い方やめてよ。俺はただ神楽の決断を聞こうとしているだけなんだけどな」

「決断って何アル」

「とぼけちゃ駄目だよ。春雨に来るって話」

それを言い放った瞬間、神楽の顔色が一瞬変わったが、すぐに答えた。

「…そうだったアルな。その話なら…」

しばらく間が空いたがついに

「お前らに反抗はしないアル」

神楽は答えた。

「…じゃあついてくるということぞ」

「好きにしろヨ」

神楽の瞳に迷いなどなかった。

「どうしたんだい？」

「何がアルか」

「お前ならもつと抵抗すると思っただけだな。連れて行くこと」

「…どうせ抵抗したって無駄アル。それに…」

私が抵抗すればみんなが傷つくアル。それは嫌アルから…」

「…そう。なら別にいいんだね」

「勝手にするアル」

「じゃあいくよ。高杉のところへ」

「……」

神威は出口に向かって歩き始めた。

神楽はそれに付いて歩きながら一つのことを思い出していた。

(…サドやろ…)

出口が開き、出ようとしたところで一人の第七師団の団員が神威の前に現れた。

「ハアハア…団長！大変です！侵入者が！」

「ん？侵入者？まさかもう…」

どんな奴が？」

「それが…！」

「…あれ？それって」

神楽はそれを聞いた瞬間にその侵入者の正体が分かった。

「アイツ…！！」

第二十話 悪い癖

その頃、真選組屯所では

「局長！」

「おーなんだザキか。慌ててどうした？」

「ターミナルでなにものかによる襲撃が行われているそうです！」

「何！？ターミナルというと高杉たちの艦隊があるところか！」

「はい！どうしたら…」

「何者かというのは分からないのか！？」

「はい！それが確認できないんです！」

「クソ！一体何が…」

「おい近藤さん！」

「トシどうした？それよりターミナルが…」

「ああ知ってる！それより…」

総悟がいねエ！！！！！！！！」

「何！？総悟がない！？あいつは寝てたはずだろ！」

どこかにいけるような体じゃ…」

「とにかく万事屋に電話だ！」

土方は即座に携帯電話を手に取り、万屋への電話を掛けた。

そうすると予想とは違う声の主が現れた。

「もしもし？」

「おまえ眼鏡か？万事屋のヤローを出せ！」

電話を取ったのは新八だった。

「それが…銀さんがいないんです！」

・・・

しばらく何か話した後

「…何！それは本当か！？」

「はい。じゃあこれで！」

電話が切れた。

「クソ…なんてこった。」

「何だってトシ？」

「万事屋がないって…」

「何！奴は今日のことを忘れているのか？」

「いくらなんでもそれはねえ。眼鏡のヤローがいうには

朝起きたら消えていて、置き手紙があっただってことだ」

「それにはなんて？」

「『俺は救えねえバカを助けに行く』…って」

「救えねえバカ…チャイナ娘のどこか！まさか総悟の奴も…

あのヤロー！勝手に突っ走りやがって！かっこつけてんじゃねえ！」

「ここで言ってもしょうがない！早く行こう近藤さん！」

「アイツだけにいい格好はさせないぞ！」

「そこじゃねえ！早く行くぞ！」

「ああ！必ずお妙さんを助けるんだ！」

二人はすぐさま隊員を起こし、出動する準備にかかった。

ターミナル。

「神威団長！われわれの手ではどうすることも…え？」

ドン！

ズシャアアアアアア！

「うるさいなあ」

「な…お前何してるネ！」

その団員はすでに死んでいた。

「目障りなハエはいらないよ。それより…」

ばかなお侍さんの暴走を止めないとね」

「……」

（……ばかねアイツ。なんで来たヨ。私のことなんかほっとけばいいアル）

「団長ー」

気がつくとも目の前には阿伏兔が立っていた。

そしてその部屋の中を見渡して、

「あらら…また派手にやっちゃまって…あんたの悪い癖だ。

それより地上のほうも派手になっちゃまってるみたいだぜ」

「いくよ神楽。阿伏兔。そっちは任せた。」

「了解ですよー」

「な…オイ！」

神威は神楽の手を引き高杉の部屋のほうへ向かっていった。

「ハアアアア！」

「ウオオオオ！」

ズシャアアアアアアアアア！

ドタドタ！

「よし行くぞ？」

「ええ」

第二十一話 戦闘開始！（前書き）

しばらく休んでてすみませんでした

これからちゃんと書いていきますんで…

第二十一話 戦闘開始！

ターミナル一回、正面玄関付近

「…よお。お前大丈夫か」

「…ええ…なんともないでさア」

「それはねえだろ。そんな体で無理するなっ…」

「…旦那ア、それより早く行きやしょ…」

グラッ…

総悟はふらつき地面に手をついた。

「しっかりしろ。お前本当に死ぬぞ」

「別に…いいんですよ」

「ま、分かってるけど…じゃあ行くぞ？」

「ええ」

そしてまた二人の前に敵。

「貴様らはここで止める！」

「うるせエ」

ズシャアアアアン！

それを二人はいとも簡単に斬る。

「つたく…きりがありやせんね…」

「ああ…攘夷どもだけならまだしも夜兎は厄介だな…」

「一人ひとりが強い…」

「ウオオオオオ！死ねえ！」

「それに…しても！」

ズシャアアアア！

「ん…ああ！？」

バゴオオオオン！

「この敵の数は…ヤバイでさあ！」

「先が見えやがらねえな！」

背中合わせになる二人。

「隊長クラスが見当たらない…もっと上の階にいるのか？」

「そうみたいでさア。行きやしょう旦那！」

「言われなくても…ウラア!!」

ズシャアアアア!

「ハア…ハア…雑魚共が手間取らせやがって…」

二人の好戦のおかげで、一階の敵はすべて片付いた。

「よし、行きやしよう旦那…」

「おお」

高杉の部屋にて。

「よおじゃじゃ馬娘」

「高杉…!」

「ここでいいかなあ?」

「ああ…ちようどいい」

神威と神楽は高杉の部屋まで来た。

「一階は全滅したみたいだよ」

「…そうか。何人だ？相手は」

「二人だよ。最初はお侍さんだけだと思ったんだけどね」

「…そうか」

「…」

「神樂。君はおとなしくここにいてもらうから」

ガチャ！

神樂は先ほどの部屋と同じような牢に閉じ込められた。

（…アイツ…なんで…）

第二十二話 楽しくなりそうだ

真選組一行。

「よし行くぞ！」

「おお！」

近藤、土方はもうすでに隊員を引き連れて出発していた。

新八。

「銀さん……やっぱりひとりで……僕も連れて行ってくれれば……！」

ターミナル一階正面入り口付近。

「……派手にやってるようだな」

ターミナル二階。

総悟と銀時。

「やっぱり敵が多くなってきましたねィ…このままじゃ」

「一人で来ようとしてバカはこのどいつだよ？」

「…へへ…すいやせん」

「とにかく早くこいつらを片付けて…ウラァ！」

「ふっ！」

次々と倒されていく鬼兵隊と春雨第七師団。

「早くいかねえと…こんな雑魚に用はねえんでさァ！」

「わかってるよ！」

ズシャアアアアア！

・・・

二階全滅。

「よし…次でさァ…エレベーターが壊れてるのが厄介でィ…」

「…あんまりしゃべるな。傷に悪い。」

「…ええ」

高杉一行。

「二階ももうやられちゃったみたいだね」

「…まあいい。奴らは俺らが倒さないという意味がない。そろそろでもいいくらいだ」

「まあでもその前に…」

ウィイイイン…

部屋のドアが開き、数人が姿をあらわした。

「晋介様！私行ってくるツスよ！」

「じゃあここは私も参加させてもらつとするでいづる」

「じゃあここは私も…」

「武知先輩はどうせ戦力になりそうもないんでいいツス。死ぬツスよ?。」

「な！？だれがせんりよくにならないと…！」

「武知。お前は残りの隊員を使ってアッチの雑魚を倒せ」

「あっち？」

高杉がテラスから見た下に、多くの車が見えた。

「真選組ですか」

「ああ。頼む」

「分かりました。」

「じゃあ行つて来るッス！」

「……」

ウィイイイン・・・

「…それともう2人入ってきてるみたいだな」

「うん。そうだね」

「………楽しくなりそうだ」

第二十三話 一人の青年と…

ターミナル三階。

総悟と銀時は上ってきていた。

「…ありや？誰もいないねえ」

「どうしたんですかねィ…」

ウィィィン…

すると、同時に部屋の向こうの扉が開いた。

「！？お前は…」

「坂田銀時と沖田総悟ですね…さああなたたちを消しに来ましたよ」

「…武知…ですかィ」

「参ったぜ、この人数はさすがに…」

「さあ…早くこいつらを片付けて…うッ!…」

総悟は胸を抱えてその場にひざまずいた。

「大丈夫ですか？無理もないでしょう。神威殿の一撃を喰らってはいかなぜそんな手負いでここに来たのかは分かりかねますが…」

早く楽にして差し上げましょう」

「お前はここにいろ。俺一人で何とかする」

銀時は倒れこんでいる総悟にそう言った。

「俺は…まだ…」

「御用改めである！」

「！？…あ」

二人が後ろを振り返ると、そこには二人を先頭に大勢の人間がいた。

「まったく…でしゃばりやがって！…お前ら！こいつらは俺らに任せろ！」

近藤が叫ぶと、土方も続いた。

「まったく…おい総悟！お前帰ったら始末書だぞ！？」

「…つちい。うるせえな土方コノヤロー…」

「おい！行くぞ！？立てるか！？」

「…大丈夫でさあ！」

ゆっくりと立ち上がり、そして走り出した。

「…まあ本来の命令はこいつらを消すことでしたからね…

では皆さん!」

「行くぞオオ!てめえらアアアア!!!」

そのまた上の階。

「……」

ウィイイイイン

そして向こうの扉が開く音がする。

「ここでお前らは終わりッス!覚悟!」

ドン!!

不意に一発の銃弾が飛んでくる。

それを反射的に銀時が木刀ではじく。

「ちっ!はずした!」

「今度は…来島と河上ですかイ……」

「ったくいきなりかよ……」

「あんたらに何の恨みもないっすけど…晋介様の敵は私の敵ッス！」

「だったら神楽ちゃんの敵は僕達の敵ですよ？」

「な…！？」

銀時たちの後ろには一人の青年と…

「うらみはきつちり変えさんとな」

聞き覚えのある声の男が立っていた。

「…！？お前！！」

第二十四話 ツラ（前書き）

タイトルからネタバレ……？？
W
W
W

第二十四話 ツラ

「お前は…!?!」

そこには、見覚えのある長髪男が立っていた。

「ツラア…!!」

「ツラじゃない桂だ」

その行方不明になっていた男が目の前に現れたときの銀時の顔は、
なんともあらわしがたいものになっていた。

「今まで何処に…!?!」

「とぼけるな銀時。お前は俺がこの程度で死ぬはずはないと分かっ
ていたのだろう?」

桂がそういうと、とたんに総悟が刀を手取る。

「桂ア! 今日こそ年貢の納め時…!」

グラッ

そう言い放ったものの、その後むなしく無残にそこに倒れこんだ。

「フン。無理をするものではない。そんなことよりもまずはリーダ
ーを

助けに行くことは先決ではないのか？」

「……チィ…終わったら必ず捕まえてやるからな……」

その場は一時休戦ということになった。

その時新八も言った。

「桂さん。アナタも人の事いえませんか？これが終わったらさっさと病院に

戻らないと……」

「分かってるさ新八君」

「フン！感動の再開はそこまでツス。行くツスよ！」

「あなたたちの奏でる曲はどんなものなのか…聞かせてもらつてゐる」

二人はとたんに襲い掛かってきた。

ダァン！！

また子が銃弾を放つ。

それを新八が真剣で跳ね返す。

ヒュ…ガキイイイイン！！

万斉が刀をフリをろすが、それを刀で受け返す桂。

「おい…お前ら」

「銀さん！沖田さん！早く行って下さい！こいつらは僕らが！」

「無理だ！こいつらは…」

銀時がそっぴいかけたが、ふと横を見ると

立ち上がって荒い呼吸で歩みを進めようとしている総悟の姿が眼に入った。

「…わかった！絶対生きろ」

総悟の覚悟に負けた銀時は、総悟の隣を走った。

「…旦那…このまま行きましょう」

「…ああ」

二人はさらに走り出す。

高杉の部屋。

ウィイイーン…

部屋のドアが開き、阿伏兔が入ってくる。

「だんちよゝ…俺も出ますよ?」

「うん…いいよ ぶっ潰してきなよ」

神威は阿伏兔の頼みをあっさり聞き入れて、そう返事をした

第二十五話 エレベーター

ガキイイイン！

ズシャアアア！

そこでは真選組と鬼兵隊&第七師団の死闘が繰り広げられていた。

「くそ…このままじゃ埒が明かない…トシ！」

「なんだ近藤さん！」

「ここは俺に任せて上へ逃げ！少しでも総悟の負担を和らげるんだ！」

「しかし…この敵の数はヤバイだろっ！」

「かまわないさ！俺は絶対大丈夫だ！お妙さんを助けるまで死んだりするもんか！」

「……でも…」

「早く行け！上は相当ヤバそうだ！逃げ！」

「…絶対上来いよ！」

近藤に急かされた土方は上へと駆け上がっていく。

上の階へと続く階段。

「…オイ走れるか？」

「まだ…何ともないでさア」

「…じゃあ急ぐぞ！」

もはや、総悟の体の心配は少なくなった銀時。

（もうこれ以上止めたって無駄だろうからな…それだけアイツを…）

「何にやけてるんですかイ？」

「…なんでもない。行くぞ！」

「え？…ええ」

…五階。

「…今度は…？」

「もうすぐ…高杉に会えてもいい頃なんですかねィ？」

「…のはずだな」

不審にも、その階には前の階とは別な異様な雰囲気があった。

「…あそこに…エレベーターありますア。」

「…本当だな」

「何のためなんですかねイ？」

「教えてやろうかあ？」

その時、後ろから声がした。

「…お前はあの時の…？」

「覚えていらっしゃったか…」

その声の主は阿伏兔だった。

「そのエレベーターは団長達のいる場所に続くエレベーターだ。」

「…それはどうも親切に」

総悟はそれを聴いた瞬間に少し眼の色が変わった。

「あんたらに興味はあるが…」

団長が銀髪のほうを倒したがつてたしな…」

一人でぶつぶつといい始める。

「だからといってその手負いの栗色ヘッドを倒しても面白くないからな…」

「じゃあその黒髪侍に相手してもらおうかな？」

「…！？」

ふと二人が後ろを向くと、そこには土方が立っていた。

「ずいぶん厄介な奴が相手だそうじゃねえか。」

その役は俺が買う。夜兔っつーもんと一回戦ってみたかったからな。

「

「大串君お前いつの間に…」

「幽霊が見えまσα…」

「この期に及んでまだそれを言うか…」

「つっつか人を勝手に殺すなっつの！」

「茶番はそのくらいにして…さて始めようかあ？」

阿伏兔が会話に割り込んでくる。

「ああ…」

「土方に借りは作らなくなかったんですけどねィ…」

「うるせーさっさと行け」

「…行くか」

「…ええ」

タッタッタッタッタ…

銀時が急かすと、二人はエレベーターに向かって走り去った。

第二十六話 近藤勲VS 武市変平太

三階。

「ウリヤアアア!!」

「ウオオオオ」

ドッオオン!

グシャアアア!

真選組と鬼兵隊&第七師団が壮絶な戦いを繰り広げている中、

二人は戦場の真ん中に立っていた。

「…派手にやってくれてるじゃねーか」

「…そうですね。まったく野蛮な連中というのは…」

「…お前は違うのか？」

「ええ…私は純然なる…」

「ロリコン？」

「フェミニストです!」

すごい形相で言い返される近藤。だがそれにも動じない。

「…まあいいさ。とにかくお前を倒せばいいんだろっ?。」

「……そうですね。では始めましょうか?。」

ジリ・・・

二人の間にただならぬ雰囲気が見れる。

・・・

次の瞬間だった。

タン!!

タン!

ガキイイーン!!

二人の剣が交じり合う。

フッ…

その場から相手が消えるような錯覚を覚える武市。

「…? ……!!」

「こっちだ!」

ズバァァァン!!

・・・

「…今…斬ったと思いましたか？」

平然と剣をかわし、その場に降り立つ武市。

「…思ってたねエよ？」

タン！

タン！

ガキイイイン！

ダン！スツ…

キイイン！

キイインン！ドン！ズサアアア…

眼にも留まらぬ交戦の応酬を見せ、二人はまた距離を取る。

「…おとなしく負けたらどうですか？」

「何言ってる。こっちは人質取られてるんだ。黙ってられるか」

「…そうでしたね。あなたたちにそんな考えはありませんよね」

「戦いたくないのか？」

「…そうではありません。私は無害なものが傷つくのが嫌いなんです」

「…そうか。面白い奴だな」

「そうですか…でもあなたたちは！」

タン！

ガキイイイン！

「…私達の害になる存在ですから早めに消しておかねば」

「…そうかよ。確かにその考えには俺達も同感だ。…が！」

ガキイイイイン！

キイイイン！

ドン！

ズシャアアアア！

「…ついでにお前らも俺達に害をなすって言うのはそっくりそのまま言い返すぜ」

ギリギリ…

激しく擦りあう剣と剣の音が響き渡る。

「…私達も負けるわけには行かないんでね…ここからは本気でいかせてもらいますよ」

「…上等だ」

第二十六話 近藤勲 vs 武市変平太（後書き）

ここからほとんど戦闘の話ばかりで内容がありませんが…これでもがんばってるんでそこはなんとか…

ダッサダサの戦闘シーンですが温かく見守ってやってください（＾０＾）

第二十七話 男なら

「ではこちらにも本気で行かせてもらいますよ?」

「…上等だ」

「…あなたにこの攻撃が見えますか?」

「!?!」

次の瞬間、武市が近藤の視界から消えた。

「こつちですよ!」

ズバァァァ!!

背中を斬られる。

「…あ…やるじゃねえか…」

「次は首に行きますからね」

「…フン。」

次の瞬間、今度は武市の視界から近藤が消えた。

「?」

ズバァァァ!!

「…さつき程度の攻撃じゃぬるいな。」

「…く。あなたこそ…」

二人はお互いに一撃ずつ相手の体に当てた。

「…あなたはすごいですよ」

「あん?…」

「たった一つの集団と二人の侍とで私達には向かおうってんですからねエ。」

「どうやっ たって勝てるはずが無い」

「…そか。」

「そうですよ。まして晋介に挑もうとは…」

「…たいしたことじゃないさ」

「ですがね…あなたたちの悪運もここまでですよ？」

最後に一つ…」

「ああ?」

「どうしてここまで私達にこだわるんですか?あの銀髪の侍さえ

殺させれば人質は解放すると思いますし…そうすればあなた方も満足でしょう

それをしなかった…あなたは死ぬべき!!」

武市が走り出す。

「…確かに。俺らの目的は第一にして人質の解放だ。

だがな…」

武市の剣が近藤を襲う…がそれを受け止めた。

「男なら…」

そして近藤の剣が

「惚れた女の弟の大切な奴を見捨てるなんて出来るかア!!!!」

武市を貫いた。

「…うあ…」

ドサッ…

「…まあもつとも…万事屋が戦って負けるなんてありえないけどな」

ドサッ…

だが近藤もその場に倒れこんだ。

「すまねえ…トシ…総悟…万事屋。後は頼んだぜ…」

その上の階。4階。

「…観念するッス。」

「そちらこそ」

「眼鏡。アンタなかなか見込みがある。ここで殺すには惜しいッスよ」

「それはどうも。でもね…」

僕は仲間を傷つける奴は許さない。絶対に…」

「…その覚悟と戦いたかったッス。行くッスよ！」

第二十七話 男なら（後書き）

すみません。少し先週はもう一つの連載のほうに手が回ってて…

出来るだけ早く更新しようと思ってたのですが…

これからはもっとペース上げられるようにがんばりますので宜しくお願いします！

あと、作者が連載してるもう一つの作品「アイス&ドロップ！」

も是非ご覧になってください。

オリジナル作品で、出来はまだなのですが…

是非お願いします！

それでは！

第二十八話 志村新八vs来島また子

そのころ、ターミナルエレベーター付近。

「…旦那ア。俺ア…」

「ああ？…どうした」

「その…それが…」

「????」

「…行くツスよ！」

バン！！バン！！

キイーン！

「弾くんスカ。やるツスね」

「そちらこそ…」

バンバン！！！！

（くそ…相手は銃。こちらは刀！いくら攻撃を弾くことはできても

間合いもつめるのは難しいか…！）

そのとき、新八の肩を銃弾が掠めた。

流れる血。

「…危ないところでした。」

「気を抜くと死ぬッスよ！」

「ウラアアアア！」

新八はまた子と距離をつめた。

「…！！！」

「喰らえエエ！」

バゴオオオン！！

また子の腹をつきが直撃する。

「うあああ…つく…やるッスね」

木刀で突いたから、相手の流血は無い。

だがダメージは少なからずあるはずだ。

「…また子さん。あなたは僕達を怒らせすぎました。」

神楽ちゃんのうれし涙以外の涙は…何者にも変えられない！

もう容赦はしませんよ。」

新八の眼がいつに無く本気だ。

「仲間を傷つけられて相当頭にキてるっすか…」

上等ッス！」

新八は真剣に持ち替えた。

そしてまた子は銃を両手に持つ。

「「ウオオオオオオ！！」」

ふたりが今ぶつかり合う。

第二十八話 志村新八vs来島また子（後書き）

連載中のオリジナル作品「アイス&ドロップ！」の方も是非見てほしいです！

二次創作ではないので！それだけは言っておきます。
では！

第二十九話 そんな彼女だから

「ウオオオオ!!」

バン!

・・・

「いない…?どこ行ったスカ!？」

「こっちです!!」

ドゴオオオオ!

新八はまた子の頭を後ろから剣で殴る。

「く…どうして真剣で戦ってこないッスカ!？」

「人の勝手でしょ？」

「痛い目見ないと分からないらしいッすね!」

「!?!…っっ?」

「もろに喰らったッすね。それは毒も入ってるッス…これで終わりッスよ?」

「ウアアアア!!」

新八は銃弾を喰らった右肩を左手で押さえ、ひざまずく。

「…くそ…」

「勝負あったツスね。その銃弾喰らって立ってた奴はいないツスよ？」

真剣で勝負しなかったのが敗因だった見たいつすね」

「…くそ…」

（体がどんどん…何だこれっ…）

「…ふっ」

「何がおかしいツスか？」

「敗因？…僕まだ負けてませんけど？」

「…まさか…さっきのを喰らって!？」

新八はその場に立ち上がった。

（これだつて精一杯のつよがりだけど…でも僕は仲間を…家族を…

神楽ちゃんを…姉上を助けるんだ!）

「…ぼくが…なぜ真剣を使わなかったか教えてあげましょうか？」

「!？」

新八は走り出す。

「くッ…止まるッス!!」

バンバン!!

また子は新八へ向けて銃弾を放ち続ける。

しかし新八はそれをはじきながらまた子へ近づく。

「それはですね…僕が真剣で人を斬る覚悟や資格が無いからじゃない…」

ただ…」

また子の目の前で剣を振りかぶる。

「死ぬッス!」

バン!!

新八の体を貫く。

それと同時に、新八がその場に倒れこむ。

また子は背を向け言葉を放つ。

「終わったスね。真剣勝負しない奴に用は無いッス…」

「僕の助けようとしている人が…犠牲者が出ることを嫌うからです

よ。

そんな…優しい子なんです。神楽ちゃんは血を求め続ける夜兎なんかじゃない…

ただの普通の心の優しい女の子です。だから…そんな彼女だから助けるんだ…!」

「!？」

振り向いた時には、そこに新八が立っていた。

第三十話 今でも

また子が振り向いたそこには、新八が立ち上がっていた。

「なっ…まだ！！クソ！もうやめるッス！」

「だから…人の勝手でしょうが！」

ヒュン！

「！？」

「終わりだアアア！！」

ドゴオオオオン！！

新八の両手で放った剣撃がまた子を昏倒させた。

「…クッ…晋介様ア…すみませんッス…」

そのまま意識を失った。

「…それでも…僕は神楽ちゃんを護るためなら真剣だってなんだって使ってやりますよ…」

ドタッ！

新八もその場に倒れこんだ。

「銃弾喰らっちゃ…これ以上はきついです…あとは…」

そして桂のほうを見る。

「あとは…頼みましたよ。桂さん…」

意識を失った。

・・・

「まさか負けるとは…なんてことぞろぞろ」

「新八君…」

「でも私はあの人のようには行かないぞぞろよ？」

「残念だったな。こつちもだ…」

同時に二人が刀を抜いた。

「…一つだけ…聞いていいぞぞろか？」

「…なんだ」

「晋介は今でも仲間だと思うか？」

「…どうだろうな」

「まあ…お前を見ていれば分かるでござる!」

万斎が跳んだ。

「ふっ…どうだろうな!」

桂も跳んだ。

ガキイインン!!

空中で金属音が鳴り響く。

キン!ガキイン!

2発、3発と打ち続ける。

「…おぬしら…太刀筋が読めぬ…坂田銀時と戦った時もそうだった…

その剣…何流でござるか?」

「答える義理は無い…」

「ふっ…いいでござる。ならば…受ける前に切り捨てるでござる…」

二人はそしてぶつかり合う。

第三十一話 桂小太郎vs河上万斉

「ふっ！」

ガキイイインン！！

二人の刀はぶつかり続ける。

「お主…やはり面白い男でござるな。戦うのが楽しいでござるよ
軽快なラップのようでござる」

「ふん…」

「！？」

刹那、万斉の視界から桂が消えた。

次の瞬間、足もとに影が現れる。

「余興は終わりだ」

ひらり

キイイイン！

地面に刀の打ちつけられる音が大きく響き渡った。

「甘いでござるよ…」

「さてどつちがかな？」

「？」

地面に打ち付けられた刀は、そのまま万斉の装着するヘッドホンへと伸びる。

そして次の瞬間、頭と耳の間を通り抜けた。

丸い物体が宙を舞う。

ガシャン。

「……」

桂は万斉のヘッドホンを斬った。

「人と話すときはヘッドホンとれ」

その瞬間、万斉の眼の色が変わる。

「……やってくれたでござるね」

「……!!」

気づいた時にはもう遅かった。

万斉の刀が桂の肩を貫いていた。

「ウアアアア!!」

そのまま壁に押し切られる。

第三十一話 桂小太郎VS河上万斉（後書き）

また更新遅くなって申し訳ありません。

第三十二話 言い訳

「ふん…桂…お主なかなかやるでござるな。だが…これで終わりでござる。」

前は坂田銀時にやられたが、貴様で敵討ちをさせてもらっでござる」

万斎の持つ刀が桂の肩を決る。

「チツ！フン！」

桂はすかさず刀を持ち替えて、万斎へ斬りつける。

「！！！！…クッ！」

タン！

万斎は後ろに下がった。

「貴様…銀時に負けたか」

「…それがどうしたでござるか？」

桂の肩からは血が流れ落ちる。

「…それをこの俺で敵討ち？フッフ…ハハハハハ！！！」

「何がおかしいでござるか！」

「いやあ…貴様銀時に勝てなかったのを言い訳に俺と戦ってたのか？」

「言い訳？なんのことでござる」

「しょせん貴様は銀時に勝てるわけなどないのだ。」

「なっ…」

万斉は何も言わない。

「まあ…とにかくだ」

「何を…」

目の前からはすでに桂は消えていた。

「!!!?…っ」

桂は万斉の背中に背を向けて立っていた。

そして刀を鞘に納めた。

「ぐ!…ッッアア!」

辺りに飛び散る、血。

その声はもう声になっていなかった。

第三十三話 敗因

「ハア…ハア…ツくそ…」

「どうしたい？つまんないよ？」

ターミナル五階。

阿伏兔と土方。

「…ハア…チイ…ふざけんなよ…」

阿伏兔は左腕一本を失っている。

土方は…全身を血まみれ。

しかも、阿伏兔の腕は土方の斬ったものではない。

夜王に斬られたものだ。

「あーあ…まだチャイナ娘のほうの手ごたえあったなあ…ヘッドホンが相手してるとか

いうやつと変わってもらおうかなあ…」

「クソ！舐めやがって！」

土方は斬りかかる。

「ウアアアア！！」

「散れ」

ビシャアアア！

斬り口にもう一太刀。

さらに辺りに血が飛び散る。

「…甘いわ。貴様の敗因は俺を舐めたことだ。」

ドタリ。

万斉は完全に意識を失った。

六階に続くエレベーター。

「…」

「おいお前…少し休んでろ」

「…すいやせん…」

銀時と総悟はエレベーターの中で座っていた。

静かな気配。そこで総悟は均衡を破るように言葉を発する。

「……旦那ア。俺ア話があるんでさア…ちょっと付き合ってもらえないですかイ…」

「なんだよ。言ってみろ」

第三十四話 理由

「俺が…なんでこんな手負いでここまで来たか…もう分かってるんでしょう?」

銀時は言葉を発しない。

「オレア…神威のヤローを倒す…とか。高杉を…攘夷浪士どもを叩き潰す…だとか。

そんな理由できてないんでさア。俺アただ…」

「……………」

ひとつ、間が空く。

「俺がアイツのこと…スキなだけなんでさア」

「……………」

「旦那ア。こんな理由で来るんでさあ。俺アバカでしょう?でも…

あいつとの時間だけは護りたいんでさア…………。

すいやせん。こんな時にバカなこと言っちゃまって

でも、俺は…アイツを助けるために…ここに来た。

それだけは聞いといてほしかったんでさア…………」

総悟が、銀時のほうに顔を向ける。

すると銀時は言った。

「…そうか。」

ただ。それだけ。

「旦那…？」

「行くぞ。」

そして、エレベーターが開く。

ターミナル五階。

「おいおい。齒ごたえなさすぎるぜ黒髪の兄ちゃん！もうちょっとマシに戦えないのかあ？」

土方は両肩を重そうにぶら下げ、その右手には刀が握られている。

「チィ…夜兎…化け物かこいつら…」

「人生はなあ…選択肢の連続。アンタはそれを間違えたのさア！」

土方の体が浮き、土方の背後の壁に体をたたきつけられる。

「クソお…奴に勝つ手は…！」

第三十五話 かばいながら

壁にもたれかかった土方は辛そうな息を吐いていた。

「…グ。てめえ…」

「だめだめそんなんじゃ。もっと楽しませてくれないと。

まあ俺は夜兎の譲ちゃんには手を出せないけど地球の野蛮人には手を出せるからね」

「……まだ…まけてねえだろ」

土方は重い体を立ち上がらせる。

「…て、めえ…俺はまだ…だ」

「がんばるのはそのくらいにしときなよあ…おじさん飽きちゃったあゝ」

「くそ…ウラァ！」

刀を阿伏兎の頭めがけて振り下ろす。

阿伏兎はそれを傘で容易に止める。

「あんたア…もうちょっと齒ごたえのあるやつだと思ってたんだけどねえ…」

どうしたの？」

「うるせえ……」

確かにそうである。いくら相手が歴戦の夜兎民族だからといって、あの鬼の副長ともあろう

ものがそこらの奴にそう簡単には負けるとは思えない。

「……もしかして……？ なにかをかばって戦ってる？」

「……」

亜伏兎は土方に問いかける。まるで赤子に問いかけるかのように。

だが土方はそれに答えようとはしない。

「……どうせ死んだら分かるんだよ？ 早く言っちゃったほうが身のためなんじゃない？」

「うるせえ！」

土方は剣を握る手にさらに力をこめた。

「オオオオオ……！」

「……！ うおつと！」

土方の剣は亜伏兎に命中しそうだというところで外れた。

「…遅いね。隠してないで言ってみなよ？夜兔をこまかせないでも思ったかい？」

「さもないと君…死んじゃうよ？」

その時、土方は後ろへ下がった。

「…なんのつもりだ？」

「…教えてやるよ」

「ああ？」

「俺のやりたいことはなあ…」

「ビー…！ビー…！」

その時、室内にサイレン音が鳴り響き始めた。

「なんのまねだいこりゃあ」

「何のことはねえ…ただのゲームさ」

『システム、ロック解除。』

これより、緊急モード、作動します。』

第三十六話 大掃除

「おいおい…なんのまねだあ？」

部屋にはサイレン音が鳴り響き、地面が微妙に地響いている。

「やっとか…っとく遅いぜ。」

「おい黒髪！こいつあなんの真似だ！」

『ロック解除完了。ただいまより、

『大掃除』を開始いたします』

「よし…始まったか」

「っ！何を…！」

「…」

そのとき、阿伏兔の周りの床から数体のからくりが出てきた。

「…なんだこいつらは」

「やるじゃねーか…平賀源外」

「そいつは確かあ…以前高杉の奴が標的にしたって言う…」

「知ってるんじゃないか。なら話は早い。」

「だからどうしたっていうんだあ！この人間みてえな奴らが奴の作
った

おもちゃだったのか！？」

「つつ…ハアハア…ああ。そうだ。」

『ご主人様。ご指示を』

「奴を…殺れ」

『了解しました』

数体のからくり型の人間兵器は、いつせいに阿伏兔へ襲い掛かる。
ものすごい速さで動いている。

「クソ…速ええ…」

『夜兔の戦闘データを捕捉完了』

「……倒せそうか？」

『とるに値しません』

それを聞いた阿伏兔が、叫び返す。

「ハッ！舐めやがって！速さなんてどうにでも補えるってんだよ！」

一人のからくりが、阿伏兎に向けてレーザーを放つ。

「っち！」

隙について、残りの全部がレーザーを放ってくる。

それも適度な時間差で。

「っ……あ！小賢しい！！おい黒髪！てめえなぜこのシステムをはじめに作動させなかった！？」

「システムの作動条件だ」

「ああ？」

土方の言った言葉に阿伏兎は意を唱えた。

「簡単に言つとだな、このシステムは侵入者の排除だ。

源外のシステムは利口でな。二人以上の生体反応を捉えた場合、どちらが敵かを

血の色で予測するんだ。俺たち真選組はあらかじめ源外のおっさんに血を抜いてもらつて

機械に設定してあつたんだよ。

だから再びこの部屋で俺らの血が流れた時、それ以外の生体は反乱分子だとみなされるんだよ。

まあ特定の場所で地面にふれさせなきゃだめらしいがな。それは知らなかった」

「くそお……！てめえわざと負けてやがったか！」

阿伏兔は今になって土方の策にはまっていたことに気づく。

そこで、からくりの攻撃はさらに加速する。

「くっ！」

『システムクライマックス。大掃除モード。』

最終段階に移ります。』

「なめるなあああ！」

全からくりが一気に大きな光を放ち、阿伏兔へと襲い掛かる。

「うっあああああ！」

「じゃあな」

土方は静かに阿伏兔に背を向ける。

そしてうしろで激しい轟音とともに広大な光が輝いているのを感じて、いった。

「すまねえな。俺はお前と戦いたかったが……」

もう一人バカを相手に仕事しなきゃなんねえんだ。」

第三十七話 言葉にならない

ターミナル最上。

銀時と総悟。

二人がそこへ着いた時、すでに一人の男が待ち構えていた。

「やあ 待ってたよお侍さんたち」

その男は笑顔で。

「ずいぶんと遅かったなあ」

そして優しい声で。

「じゃあ行こうよ。ここでやりあつのもなんだしね」

しかし、それとは裏腹に、彼の放つオーラはまがまがしく、そして黒い。

銀時は思い立ったように口走った。

「神威つつたな。てめえどうしてそこまで俺にこだわる」

その唐突な質問に、神威は即座に答える。

「そりゃあ…俺は強いやつにしか興味が無いからだよ」

「……神楽は弱いんじゃないのか？」

「今は、ね。でも、アイツを強くするのは俺だよ」

その言葉に、銀時の後ろに立つ総悟が反応する。

「……っ。てめえ……」

「なんだい？」

「……」

総悟は何かを言おうとしている。

しかし、怒りが言葉にならない。

「さて……そこのお侍さん。君にはどいてもらつよ。僕はその銀髪のお侍さんに

用があるんだからさ」

銀時はそれをきいて少し顔をゆがませる。

「……沖田。」

「……なんですかい？」

「………奴と戦れるな？」

その急な質問。それはただその言葉の意味だけをあらわした言葉で

はなく、もつと

深いものがある気がした。

「……そのためにここへ来たんでさア。出来ない分けないでしょう？」

だが、あえてそこには触れなかった。

それを聞いて銀時は安心した様子で、総悟を指差し神威へと叫ぶ。

「ワリイな。お前の相手はできねえ。まあこいつを倒すことが出来たら

考えてやってもいいぜ！

俺はそのバ力を相手にしなきゃいけないからな」

神威の背後の廊下の壁には、もう一人、強い眼をした男が立っている。

高杉晋助。

「あれ？もう来てたの？」

「そういう約束だ。ワリイがそいつは俺がもらっぜ。」

「じゃあしょうがないかあ

そいつぶっ殺してさっさと銀髪のお侍さんの相手しに行こう」

「やってみやがれい」

神威はおもむろに部屋のほうを向き、手をかざして扉を開ける。

「通路が汚れると面倒だからね。個室で相手するよ。」

あ、安心して。罾なんて無いからさ」

本当に無い。

それは神威の性格から考えて、ないであろう。

「上等でイ」

それだけ発して、総悟はそこへ入ろうとする。

「おい」

銀時が沖田を呼ぶ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976u/>

銀魂 ～最強の二人～

2011年12月27日19時45分発行